

4. 本殿の特徴

・八幡造り

八幡造りとは神社本殿形式の一つで切妻屋根、平入りの前殿と後殿を連結し、両者の間に生じた屋根の谷に樋を入れたもので、重要文化財に指定されているものは柞原八幡宮本殿の他に宇佐神宮本殿（大分）、伊佐爾波神社本殿（愛媛）、石清水八幡宮本殿（京都）の3棟のみである。ただし、柞原八幡宮本殿は他と異なり前殿、後殿の棟に直行する棟を渡して工の字になっている。



図6 修理前屋根東から見る。(左が前殿、右が後殿)

・花堂

花堂は本殿の西面縁上北端に取り付く一間社流造りの小堂で「由原宮境内指図」（江戸末期：柞原八幡宮所蔵）に「花堂」と書かれている。また、花堂が取付く側廻柱からは「花棚」の墨書が発見された。花堂の床板中央とその下の縁板に排水のための穴が開けられ、床板は中央に向かって傾斜して溝が彫られていたことから、仏堂などに見られる供水や供花を整える「閼伽棚」のように使用されたと考えられる。ちなみに、昭和8年の「宮繕日誌」（柞原八幡宮所蔵）には「赤棚」の記述があった。

このような神社本堂に付く小堂は柞原八幡宮を含め大分県南部に4棟、宮崎県北部に3棟確認でき、他では類を見ないためこの地方の特色のようだ。

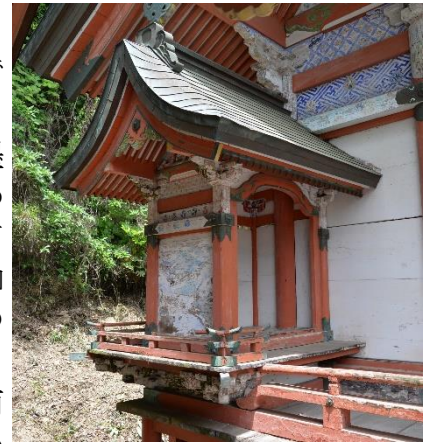


図7 修理前花堂（詳細）

5. 発見物

・墨書

本殿からは年月、大工名、番付、落書などが発見された。当初の墨書のみならず明治19年、昭和34年など中古の修理が判る墨書も散見された。建立時の墨書は建立年代の裏付けのみならず、各部より日付け入りの墨書が発見されたことから、組立の工程が凡そ明らかとなった。

・当初の塗装

本殿は嘉永3年の建立以降、主に昭和8年、昭和34年に全面塗り直されており、現状は昭和34年の塗装が痛んだ状態で見えている。本殿は部材に塗装を施してから建てたようで、見え隠れや仕口内部に当初塗装が残存しており、当初の様子が判明した。

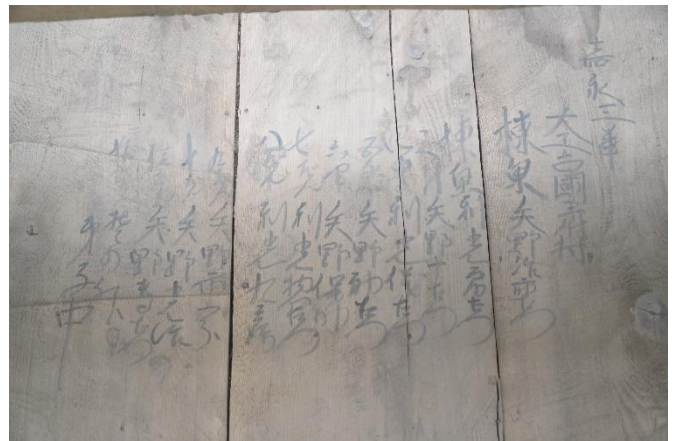


図8 化粧裏板墨書（古国府村の大工名が並ぶ）



図10 桁下面（当初の丹塗が残る）



図9 妻飾り琵琶板（笈形下に当初の彩色が残る）